

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



私たちは、医療福祉施設を中心に設計を行っています。クライアントの想いを叶え、それが社会貢献につながる設計を目指しています。

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町 10 番地

TEL:075-211-7277 FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



『人としてあたりまえに生きたい ——60年のろうあ運動、次の世代へ』 ついに 発行！ 清田 廣 著

4年以上『福祉のひろば』で連載いただいた「ひととしてあたりまえに生きたい」が、書籍になりました！ 巻頭メッセージと座談会も追加収録し、ろうあ運動の歴史、リーダーに必要なもの、これからの課題と可能性など、盛りだくさんの内容です。

ご購入・お問い合わせは下記まで。カード決済もできます！

<福祉のひろば／総合社会福祉研究所>

大阪市天王寺区悲田院町 8-12 mail: hiroba@sosyaken.jp

TEL・FAX: 06-6779-4955

HP: <http://www.sosyaken.jp/hiroba/>



コロナ禍での経験を "これから"に活かす



★あおば福祉会 おひさま岡町保育園★

おひさま岡町保育園は2001年、待機児童解消にむけ、法人3園目の保育園として誕生しました。大阪府豊中市の住宅街にあり、騒音問題など課題はありますが、地域にとって必要な福祉施設として運営しています。

コロナ禍でも、今年度は7年ぶりに4歳児のお泊り保育を再開しました。保護者の意見から中止したものの“子どもたちにとって”という視点で検討し、さらにコロナ禍でなんでも中止するのではなく、発達を保障する保育を大切にしたいという思いで、保護者とも話しあい実現しました。5歳児の合宿でも、子どもたちが自ら計画し実現する保育を大切にしてきました。きびしい時代であっても、自分たちでつくりだす「保育は創造」を合言葉に、保育をおこなっています。

(写真・文：福井 茂)



★やまがた市民福祉会 とかみ共生苑★

とかみ共生苑は、山形市の西山形地区、三角がうつくしい富神山^{とかみやま}の麓にあります。緑に囲まれていて、ご利用者だけではなく、時々カナチョロ（トカゲ）やヘビ、オケラなど珍客が来苑します。

コロナ禍で制限のあるなか、入居者の個々の思いや希望を尊重し、充実感とよろこびが満たされる「ふつうの生活」にとりくんでいます。天気の良い日は、気分転換に季節の変化を楽しみながら散歩も。「歩かないと足腰が弱くなってくる」「自由に歩きたい」という言葉に、なにかあれば駆けつけられる距離を保ち、またあるときは隣に寄り添い、ご一緒にしています。自然の景色を眺めながら、施設内ではうかがえない思い出話をたくさん教えてくださいます。

（写真・文：須貝圭子）



★ゆたか福祉会 法人本部★

2020年度は養成校と懇談し、コロナ禍での不安を出しあいながら現場実習の重要性を確認。可能なかたちで受入れをおこない、昨年度からは実習生に法人負担でPCR検査をお願いしています。2011年度からスタートした法人ガイダンスも、オンラインでの半日に変更しながら継続。実習先でのエピソードを語り合うなかで「ほかの実習生も同様に、障害のある人とのかわりに戸惑ったことを知ることができてよかった」と表情がやわらぎます。

私たちの仕事は「対人援助」が基本であり、当事者の方々や職員と直にふれあいながら、実体験での「学び」が重要です。今年度の法人ガイダンスは、9月に半日ではありますが、3年ぶりに対面で開催します。

(写真・文：向 幸子)



★大阪福祉事業財団 高鷲学園★

大阪府の社会的養護下で生活している子どもたちは、今年3月31日時点で1,362人です。私たち高鷲学園職員一同は、子どもたちの笑顔と安心な生活環境を守ることに、力をあわせて日々奮闘しています。コロナ禍での夏休み、エネルギーの高い子どもたちと一緒になができるのかを考え計画し、感染対策をしながら、キャンプ（中止になったフロアあり）、BBQ、スイカ割り、お店屋さんなどを実施！ 普段とは違うこどもたちの表情や、職員のみなさんのがんばる姿を見ることができました。とくにキャンプは、子どもたちも職員もキャンプの経験がないなかで、企画・実現しました。新たな気持ちで作り上げてきた経験は、これから先にも活かせるものとなりました。これからも、職員一同力をあわせて、子どもたちの夢を応援していきます！

(写真・文：岡出多申)

(グラビアにご登場いただいた4つの法人には、特集の座談会にご協力いただいています。)

●特集● あらためて考える、社会福祉実習の位置と役割

【養成校と現場の座談会】参加者

岡出多申さん／須貝圭子さん／向幸子さん／福井茂さん
黒澤祐介さん／鴻上圭太さん／司会・中野加奈子さん 10

●サブ特集● 第5回「大震災から学ぶ」陸前高田学校（Ⅱ）

煙突の上で一人、津波から逃れて——米沢祐一さん 30
被災地でいちばん海に近かった中学校。全員の命を守ったもの
——気仙中学校 34
二度と学校管理下で子どもを死なせないために——大川小学校 36
私たちは5回の陸前高田学校からなにを学んだか 浜岡 政好 38

●トピックス●

【PHOTO】全国福祉保育労働組合滋賀支部 40
「こども家庭庁」設置のねらいを考える 垣内 国光 42

●連載●

WORK WORK——わくワク——

「福祉」を身近に、日常に 特定非営利活動法人PIPP0 48
ケア労働処遇改善キャンペーン！③
実態に見合った医療体制の抜本的な見直しへ 山下さをり 50
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～
きこえない方の人生と最期 香川 千佳 52
座ることを考える

「明るさ」は作業姿勢・健康にも影響する 増澤 高志 56

JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合（19）

コロナ禍での気づきを、今後の実践や職員集団づくりにどう活かすか 60

私の履歴書 社会福祉経営全国会議（19）

外から飛び込んだ福祉の世界。やりがいと誇りをもって 小杉山 敬 62
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（39） 水野阿修羅 64
相談室の窓から 青木 道忠 66
それぞれの個性や特性が尊重され安心してヘルプが出せる社会に③
育つ風景 コロナのなかの救助の船 清水 玲子 68
映画案内 『はちどり』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

大阪市東淀川区の野宿者ひき逃げ・死亡事件 生田 武志 72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート
解説するのじゃ！ ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76
花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

みんなのポスト 46／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● コロナ禍での経験を“これから”に活かす

福祉のひろば

2022年10月号

●表紙の絵●
神門やす子



日々の活動の糧に

——『福祉のひろば』誌

日本共産党久慈市会議員 城内 仲悦

私が久慈市議会議員に初当選したのが、一九七九年四月でした。当時は、選挙期間が一〇日間でした。当選証書は、四月二二日にいただいています。それ以来、四三年間、住民福祉の向上のために活動をつづけてきました。

私が当時、地道に活動をつづけていた、久慈地区の原水爆禁止運動に関わりはじめたのが、二一歳の時でした。事務局次長として運動を支え、原水爆禁止広島・長崎大会に久慈地区の代表として、毎年三～五人の代表団を組織し、地域での代表派遣募金活動をおこない、送り出す活動をつづけてきました。現在は、原水爆禁止久慈地区の会長として活動をつづけて、今年、三年ぶりに開催されました広島大会に、一人の代表を派遣することができました。

市議の二期目に当選。市議会では、教育民生常任委員会に所属していました。日々、福祉にかかわる仕事が続いているなかで、専門誌があればいいなと思っていたときに、「しんぶん赤旗」の日刊紙に『福祉のひろば』発行の記事が掲載されました。当時は年四回の季刊でしたが、さっそく注文しました。私の日常活動のバイブルとして、座右の書として、支えていただけてきました。

『福祉のひろば』誌の普及は、支庁舎内の福祉関係の職員や保健婦さんたちからスタートしました。『福祉のひろば』の読者会の開催が、元編集主幹の黒田孝彦さんから呼びかけられ、何回か開催しました。これも、普及拡大の力になりました。3・11東日本大震災津波被災地への支援、現地に足を運んでいただいたことにより、心といのちの交流



じょうない ちゅうえつ

1949年生まれ、現在73歳、元気に活動中。1970年共産党入党。日本共産党久慈地区委員会副委員長。日本共産党久慈市会議員11期目。原水爆禁止久慈地区協議会会長。久慈学童保育所みつばちの家父母の会会計。寺里町内会会長。

が深まりました。

現在、岩手県久慈市、人口約三万二八五四人（七月末現在）の小さなまちに、四三人の『福祉のひろば』の読者がいます。読者は多彩な顔ぶれで、①久慈市社会福祉協議会、②久慈市の幹部職員、③元保健師、④元看護士、⑤老人施設長、⑥保育園長、⑦県議会議員、⑧市町村議会議員、⑨スナックのママさん、⑩元市職員、などです。

『福祉のひろば』誌の読者が増える魅力はどこにあるのでしょうか。その一つは、現場に出向き、生の実態がしつかりと届いているということ。二つ目は、特集記事が時間が経過しても、色あせることなく新鮮であること。三つ目は、それぞれの記事が、短くまとめられていること。四つ目は、表紙の作品、神門やすこさんの絵はしあわせを届けてくれる、あたたかい絵です。大ファンです。カレンダーのファンも多くいらっします。

いっぽうで、世の中はおかしい状況がつづいています。新型コロナ対応の無策、安倍元首相の「国葬」の強行、岸田内閣・自民党議員の旧統一教会との癒着。内閣支持率が急落しています。

市会議員の一一期目の任期は、来年の七月です。闘いがつづきます。ロシアのウクライナ侵略は、核兵器廃絶の一日もはやい実現の必要性を示しています。これから、二足・三足のわらじを履きながら活動し、『福祉のひろば』のさらなる普及に努力していきたいです。

つながり、学び合う「ひろば」の役割をあらためて

今号の特集は、本誌でもはじめての試みとなる、福祉現場と養成校との座談会です。保育、障害、高齢、児童養護のそれぞれの現場と、保育士、介護福祉士、社会福祉士の養成校の教員にご参加いただきました。コロナ禍のなかで、学生の社会福祉実習については、送り出す側も、受け入れる側も、つねに苦慮を強いられてきました。しかし、実習が制限されてしまった三年の経験を経て、現場のみなさんも、養成校のみなさんも、あらためて社会福祉実習の大切さとその役割を感じていることを語ってくださいました。

以前、赤ちゃんを抱っこしたことのない学生さんが、保育士実習ではじめてゼロ歳児を抱っこして、とてもぎこちなくて危なっかしかったけど、命に触れたような、すごくしあわせそうでゆたかな表情をしたことが忘れられない、という現場の方のお話を聞いたことがあります。座談会でのみなさんのお話から、あらためて、子ども、障害のある人、お年寄り、そしてステキな福祉実践との出会いは、人の心と人生をゆたかにするものだと感じます。

サブ特集では、前号にひきつづき「第五回陸前高田学校」を、視察を中心に紹介します。あらためて、一一年前の東日本大震災の発生からその後の被災地取材などのとりくみ、陸前高田学校の開催に

至るまでをふり返るなかで、陸前高田や久慈をはじめ被災地のみなさんとの縁は、『福祉のひろば』がつなげた縁であると感じます。

先月号のトークでもご登場いただいた、陸前高田学校の校長をとめてくださった菅野悦雄さんは、菅野さんの夫人が当時、陸前高田市社会福祉協議会につとめておられ、『福祉のひろば』の読者でした。東日本大震災後、当時の黒田事務局長と豊田常任理事が、まずは会員・読者に会いに行こうと、宮城県・岩手県・福島県の会員・読者の住所をもって訪ね歩き、そこで出会ったのが、菅野さんでした。読者であった夫人は、津波で亡くなっておられました。菅野悦雄さんの仕事は市の農林水産関係で、「福祉」はまったくの畑違いです。ですが、被災後のたいへんな状況のなか、黒田事務局長と豊田常任理事との出会い、『福祉のひろば』との縁を大切にしてくださり、その後ずっと、被災地でのたくさん学びにお力添えをいただきました。

今号のトークにご登場いただいた、岩手県久慈市の城内仲悦^{ちゅうえつ}さんは、東北の地でずっと小誌の読者を広げる活動をつづけてくださっていました。久慈市で読者会を開くなど、東日本大震災前からのつながりです。震災のあとも交流や学び合いをつづけ、さらに読者も広げていただき、とても大切なご縁をいただいています。

全国の社会福祉関係者、地域のみなさんが『福祉のひろば』を通してつながりあい、学び合える「ひろば」としての小誌の役割や総合社会福祉研究所の活動の意味を、あらためて感じています。

(編集主任)